

大学

アーカイブス

東日本大学史連絡協議会会報

1995. 3. 6 No. 12

Association of College and University
Archives of Eastern Japan

1994年10月5日(水) 合同研究部会

基調講演 I

考古資料の整理と解釈

西南学院大学文学部 高倉 洋彰

1 「それは今から何年前ですか？」

遺跡を発掘したり、博物館で考古資料を展示したりすると、こういう質問を受けることが多い。その遺跡がいつごろの人びとの生活の痕跡なのかを知ることは意外と難しい。答えを期待する側にとって、さまざまな回答、たとえば「古い時代です」「弥生時代です」「弥生時代中期後半です」「弥生時代中期後半ですから、紀元前1世紀の後半です」の中では、最後の例が求めるものであろう。そして少なくともこの程度の答えをしないと、考古学は歴史学と胸を張ることはできない。

ところがこう答えると、「どうしてそれがわかるのですか?」という質問が帰ってくる。誰も見たことのない時代、どこにも年代が書かれていない遺跡や遺物が使われていた時代をどうして判断するのか、そしてそれが何年前となぜ言えるのかということに対する疑問は当然と思う。

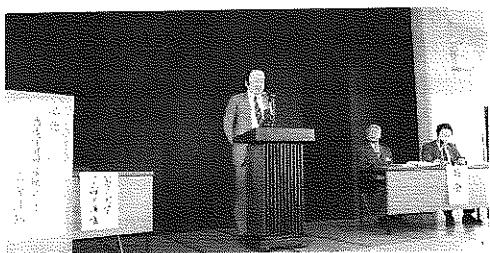
考古学にとって、先達のご苦労があつて今では研究者相互の間に一応の安定した年代観が成立しているが、年代の決定はたいへん重要な仕事である。今脚光を浴びている年輪年代決定法や放射性炭素年代測定法ほかの理化学的な方法もあるが、基本は考古学的方法、なかでも型式学的方法と層位学的方法にある。

現代社会には自動車があふれ、街に新旧とりどりの車が走っている。免許をもたない私にはせいぜい白い乗用車、赤いスポーツカーといった程度にしかわからないが、若者はあ

れは○○社の88年型、これは△△社の92年型というように見わけることができる。同じ会社の自動車でも製作年が違えば、型式は異なる。しかも車の型は極端には変わらないから、少しの変化からA・B・C……といった型の流れを知ることができる。簡単に言えば、この型の違いと流れを捉えるのが型式学の方法で、縄文時代の浅鉢・深鉢なども同様に形態の細かな相違からいくつかの型に分け、相違の変化過程から流れを把握している。

これに対して層位学の方法は埋まつて層になったものは上よりも下が古いという原則を利用する。この場合、ひとつの層には雑多なものが含まれる。型式学的に分類したものは乗用車や壺の形をした土器といった単一のものでは比較できるが、同じ車でも乗用車・スポーツカー・ダンプカーなどが一様に変化するわけではない。だが同じ層にあればそれらは同じ時代の所産といえる。一棟の住居跡の床面から発掘された遺物はその材質や形態・用途がなんであれ、同じ時期に属する。同期生のようなものである。

型式学の方法・層位学の方法で分類しただけでは考古資料の時期は決定できない。父よりも祖父、祖父よりも曾祖父が年上なのは自明の理であるが、我が家の父よりも隣家の祖父が若いなどのことはいつもある。それに祖父と曾祖父の関係はふたりにとって子と父になる。これと同様、考古資料を分類しただけでは新旧の順序は決まっても、時期はわか



高倉先生の講演

らない。ただ同じ型式の、あるいは同じ層位の考古資料に、たとえば紀元57年に後漢光武帝から下賜された「漢委奴国王」金印のように年代を判断できる資料が含まれていれば、他も同様の時期に考えることができる（交差年代決定法と呼んでいる）。

少し話は固いが、考古学ではこうした方法を駆使して、時期や用途などを考え、それが使われていた時代や社会を考える。冒頭の質問に戻れば、弥生時代中期後半という時代の説明をし、この時期の遺物から前漢後期の遺物が混在するが後漢のものは交じらないことを付け加え、「弥生時代中期後半は紀元前1世紀の後半です」と年代観の根拠を述べれば納得してもらえよう。さらに、漢の文物の混在が弥生時代中期後半に日本列島に住んだ人びとと漢帝国との交流が本格化したことや、列島に国があり王のいる新たな段階に進んだことを述べれば、完璧に近い。

2 「この遺跡を掘って何がわかりますか？」

1で述べたような考古資料で時期を決めるこ_トとを編年と言_うい、考古学の基本である。そして研究者は資料の分析に心血を注ぎ、小異はいまだに残っているものの、大同についてはほぼ一致してきている。しかし歴史学である考古学はここでとどまつてはならない。

考古学の理論を確立した大先達のひとりである濱田耕作氏が「考古学とは過去の人類の物質的遺物を資料として人類の過去を研究する学問である（要旨）」と規定したように、考古学は遺跡・遺構・遺物のそれぞれを、そしてその総体を通して人びとの軌跡を明らかにする学問であるが、これは考える以上に難しい。福岡県太宰府市宮ノ本遺跡で調査された奈良～平安時代の墓地を例に、このことを考えてみよう。

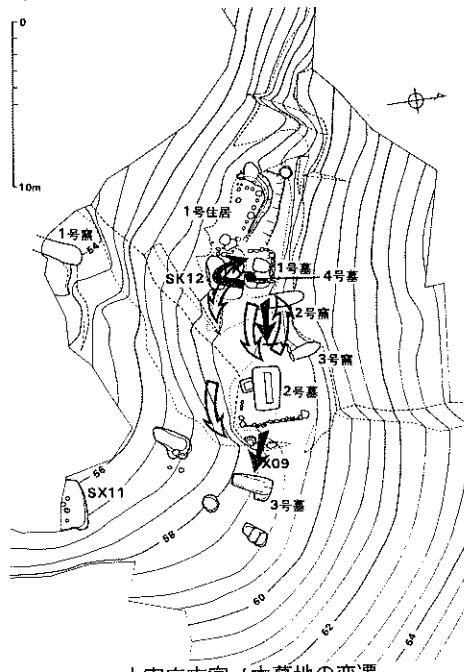
この遺跡では、大宰府官人一族のものと考えられる急な傾斜面を段状に造成した平坦地

にある3基の墓（1～3号墓）と、それに先行する4号墓が発掘されている（図参照）。

1～3号墓は石組の立派な外護施設をもつ火葬墓で買地券をともなう1号墓、石組の立派な外護施設をもつ土葬墓の2号墓、同じく土葬墓だが外護施設の見られない3号墓からなり、1号墓の下にある4号墓は蔵骨器（土師器無頸壺）からなる火葬墓である。蔵骨器や副葬土師器からみて、8世紀中頃の4号墓がもっとも古く、8世紀後半の2号墓、9世紀後半頃の3号墓と続くが、1号墓は時期を示す遺物を欠いている。このように4基の墓が4号→2号→3号の順になることは明らかなのだが、1号墓をどこに位置付けるかによって解釈が変わってくる。

これには、1号墓を9世紀中頃以降とするA案と、8世紀中頃～後半とするB案のふたとおりの解釈がある。

A案は、1号墓検出の買地券（後述）に出てくる人名「好雄」に着目し、雄で終わる命名法が平安時代前期の詩人「紀長谷雄（845～912年）」のように9世紀中頃以降にみられることや、買地券に記された代価としての物品の内容・順序が承和7年（840）の淳和上皇の御葬料に通じていることを根拠としている。すなわち墓地は4号墓→2号墓→1号墓



太宰府市宮ノ本墓地の変遷

→ 3号墓（図の白抜き矢印）もしくは4号墓
→ 2号墓→3号墓→1号墓という順に築造されたことになる。図示したように4基は無秩序に動くが、近現代の墓を見てもこれくらいの動きはあるので、許容の範囲にある。構造をみると、火葬墓→石組土葬墓→石組火葬墓→土葬墓、もしくは火葬墓→石組土葬墓→土葬墓→石組火葬墓と変化する。いずれにしても火葬と土葬が混淆することになるが、有り得ないことではない。

B案は1号墓に併出した買地券を重視する。買地券とは、簡単に言ってしまえば、死者が先住者（埋葬遺骸）から墓域の権利を買い取ったことを冥界に証明する一種の権利書である一族・一家が他者の墓地を買い取った時に先住者の靈魂がそのままどまる 것을怖れ、土地神に新たに埋葬者の権利を認知してもらうためのものである。したがって新しく墓地を開発したときには必要ない。これを宮ノ本墓地にあてはめると、先住者は4号墓をはじめとする蔵骨器を用いた小規模火葬墓群の埋葬者ということになり、先住者が居るからこそ買地券が必要になる。つまり4号墓の次は墓地取得を宣言する買地券をもつ1号墓であり、2号墓→3号墓と続くと考えるのである。

先住火葬墓に続く官人一族墓の構造は石組火葬墓→石組土葬墓→土葬墓の順となり、4号の直上に造られた1号墓から順次東へと、とともにスムーズに展開していくことになる（図の黒矢印）。

ふたつの解釈はいずれも決定打を欠く。しかも、A案であれば火葬と土葬が混淆し、墳墓の構造もまちまちで、道教思想も借り物的な、いささかアバウトな社会に古代の日本をイメージできるのに対し、B案は奈良時代に普及した火葬が次第に土葬に戻る過程や墳墓構造の弛緩、そして道教思想の定着などの、時代の流れを描いているという、異なった時代相をもたらしかねない。ひとつの事実が解釈の如何によって時代の様相を左右しかねないのである。

このように、考古資料の解釈は研究者の解釈であって、研究としてどんなに優れていても真実であることを保証してはくれない。だから研究者はよりいっそうの努力を重ねる。華やかなニュース報道の裏側で、「この遺跡を掘って何がわかりますか?」という質問に答えるために、考古学研究者が苦惱し努力していることを理解していただければありがたいと思っている。

なお、本稿は当日の講演内容との関わりで新たに稿を起こしたものである。

1994年10月6日(木)合同研究部会

基調講演Ⅱ

藤本隆士氏「日本の近代化と高等教育 －大学史を見つめて－」を聞いて

福岡大学大学史資料室 藤本 俊史

のが社会科学的にどのように位置づけられるかといった極めて貴重なものであった。

日本の近代化のスタートである明治維新を、「天保の幕制改革以後から明治22年の帝国憲法の成立まで」とした上で、日本の近代化とは?という命題に対して氏は、次のように主張され日本の高等教育を位置づけられた。

まず、アジア社会の中でインドがイギリスの植民地になり中国が半植民地になった19世紀のいわゆる世界の帝国主義経済の中で日本がなぜ独立を守りとおすことができたのか、

第3回合同研究部会が初めて関門海峡をわたって九州は福岡で開催された。その2日目(10/6)に基調講演Ⅱとして福岡大学商学部の藤本隆士教授が標題の講演を行った。藤本氏の専門は日本経済史で、その中でも特に近世～近代の貨幣史あるいは捕鯨史を研究されている。

いうまでもなく大学史に限らず学問研究は様々なアプローチが可能で、今回の講演は、日本経済史の立場から日本の近代化論を展開しながら、その中で日本の高等教育というも

という服部之總の基本命題をとりあげ、氏は、「ただそれのみで日本の歴史を割り切るには少々難があり、やはり我々が幕末経験したペルリの来航によるウエスターインパクトを受けたことで急速に近代化を進めざるを得ない状況に置かれたことは事実としても、しかし外からの刺激による発展を規定するのはやはり内側の条件ではないか。国際的な条件の中で日本の歴史的な条件が相絡まって歴史は展開していく」と。さらにここで日本の歴史発展過程を考察するための因子を2点設定する。一つは、国家と社会というものがはっきり姿を現すのが近代だということであり、他の一つは日本の国家あるいは社会は重層的な社会すなわち様々な多層構造をもった社会であるということである。すなわち、イギリスをはじめとする欧米の先進資本主義国の社会体制を学びはじめたときに気がついたことは、国家と社会がそれぞれ役割分担を果たしている社会であるということになると、近代国家づくりを急速に進めなければならないという1つのスローガンが幕末から明治の初期にクローズアップしてくる。同時にそういう中でいわゆる外圧を受けながら、それをいかに防ぐかということが緊急課題として浮かび上がってくる。これが明治太政官政府後、はっきりする富国強兵というスローガンの主張であり、国家と社会が富国=経済力对付することと、強兵=強力な軍隊を持つことをそれぞれに要請してくる。

明治3年に大教宣布の詔・宣教使心得書が出される。当然幕末開港し外国の文物が入ってくると、宗教・その他の文化が導入される。ところが大教宣布によってすでに皇道主義が主張されている。このことが世界経済に置かれた日本の一つの特徴。すなわち日本の資本主義というのは、当時外国の文物を輸入できるくらいの文化の高さをある程度もっていたといえるし、キリスト教という欧米文化が入ってくるのに対して日本は日本だという形が一方では強調されている。日本の社会というのはその意味でも重層的な社会すなわち色々な二重構造あるいは多層構造をもった社会といえる。

明治14年に小学校教員心得が制定され、職工学校・実業職工学校・実業補習学校などが

これと前後して設立されるが、これは日本の伝統工業（絹織物・綿織物・綿糸など）や名人芸的な技術職人の保護育成という、当時の日本の土着性として求められたものであった。ところが幕末開港以後、極端にコストの安い綿花がインドや中国やアメリカから日本に輸入されて、とても労力や費用を多く費やす綿の木を日本で栽培することが開港によって成立しないことがはっきりしてくる。このような大転換の中で一つの大きな問題は、この殖産興業段階の資本の成長期（これがいわゆる政商が成長してくる時期。商業資本の所有者達たとえば小野組・島田組・三井組がそれである）、明治5年に国立銀行条例で国立銀行がつくられる。この国立銀行条例と並んで政商達が大きな役割を果たす。それは地租改正が全国的に施行され、当然小野組・島田組・三井組やその他國立銀行に預金がなされるようになり、それが預かり金としてまとまってくる。国立銀行なり政商達はそのまとまったお金を預かっている期間に貸付けてはその利鞘で経営を成立させていた。ところがその地租が各地方の國家納付機関に直接納められ大蔵省に収集されるということが長州の井上馨を通じて三井の大番頭の三野村利左衛門に政治情報として入り、三井組は貸付金を早急に回収し難を逃れるが、小野・島田の両組は情報をキャッチできず倒産してしまう。これがまさに現在まで続いている政治と財界との癒着・談合だが、明治初年の殖産興業段階、原始的蓄積段階からなぜこのような姿をもたらしたのか。これが後進資本主義国の急速な産業資本育成のために採られた政策の中での紆余曲折の一局面を示していると考える。

このような経済界の動きに対して、明治6年にキリスト教禁令が撤廃され、7年に東京女子師範学校、8年に同志社、9年に札幌農学校がつくられ、学校制度そして官立に対する私立の教育機関が次第に整っていく。15年に東京専門学校やその他のいわゆるミッション系の私立学校あるいは佛教系の学校などもこの頃から少しづづできはじめる。そして19年の帝国大学令で官立大学として発足した東京帝国大学が文部省の保護のもとに形を整えていく。ここにまた二つの流れを対比することができる。すなわち、国家的な官学的な要

請と、社会的な要請あるいはそれにこたえる私学の台頭である。この芽生えは既に近世にあり、その一方は藩校としての侍の育成であり、他方は寺子屋という日本独特の庶民教育であると考える。例えば読み書き算盤を教えるということ。これは明治以後の商業学校につながる一つの伏線として考えていいのではないか。言い換えると、資本主義の成長という近代化とは数字が貫く世界であるといえる。つまりもっとも合理的な理論を展開する一つの姿が数字という形で現れてくる。そう考えると日本の徳川時代の石高制は見事にあらゆるものを見渡す限り、身分決定まで数字で行う。それが明治に受け継がれ合理性を受け入れる基盤となったといえる。

明治初期は資本主義を着々と進めながら、しかも10年20年という大変短いスパンで追いつけ追い越せというスローガンのもとに、産業資本を育成しながら、教育制度を整備していくが、ここで重要なことは明治15年の軍人勅諭とその前に出された徵兵令。つまり富国と歩を並べて徵兵政策が進められていくという二面性が一方では進められなければならなかつたということ。これは軍部の力が次第に強化されていく過程で、一方では産業資本が成立し、その経済力で軍事力を補強する。そしてそれを補強できるような形で学校制度が整えられていかざるを得ないような状況が後進資本主義の日本の中にできたのは当然ではなかつたのか。

また氏は、日本の資本主義の成立を明治30年代と定義した上で、工業生産に重点を置いてヨーロッパに追いつけ追い越せと教育制度も走る中、さらに国家政策の目標に国民が賛同する方向付けをもった学校制度が進められる。その中で、工場労働者の賃金問題という社会問題が生じ、一方では帝国陸海軍の要請がパラレルに進められる。ここに日本独特の実業教育の制度が生まれる要因があると考え、事実、実業教育も次第に工業に力を注ぐようになる。そして産業資本が次第に成長していく過程で、その産業を支える産業戦士が工業技術の中堅を担い、帝国大学出身のエリートが大学・高専の教育に携わる者や優秀な官僚を育てるのに対して、専門学校が現場の第一線で活躍できるような者を育て、そ

の下に商業学校・工業学校・農業学校・水産学校という中等の実業学校が定着させながら日本の資本主義を支えてきた。これが日本の近代化に大きな役割を果たしたと考える。

明治の末から大正にかけての金融資本、いわゆる産業が巨大化していくに従って、膨大な資金を要求し始める。それが金融機関に依存をする金融資本主義段階ということになり、それ以後、徵兵を中心とする日本の軍部が成長が急速に力を持ちはじめる。大正から昭和にかけていわゆる金融資本制度のもとで政商が財閥にまで成長しながら産業資本と関わる教育の徹底、それから大学・高等専門学校に対する要請が、社会的な要請から国家的な要請の方にウエイトがかかる。資本主義の成長と停滞と恐慌と急成長というようなものを受けながら、それに対応して学校の高等教育制度がいろいろ修正されていく（教育勅語を基本とした教育や学校軍事教練の実施など）。そして次第に国家統制が学校制度に及び、高度国防国家建設という至上命題が問題とされ、それに対する一つの反抗として大正デモクラシー・大正教養主義・民本主義・理化学研究所設立、そして森戸事件がある。

昭和20年に敗戦を迎えるが、昭和18年の学生動員もまず文科系から徵兵された。ここに日本経済の不均等発展に伴った思考というものが、急速な後進資本主義の成長のために生じていたのではないか。いわゆる戦争といえば工業力に力を入れる、戦いといえばまず文科系から特攻隊に。これでは社会の総合的発展は非常に難しいのではないか。

最後に氏は戦争体験を交えて次のように講演を締めくくった。

「私は中学5年間英語を学びましたが、それ以後は敵国の語学教育は必要がないといった非常に短絡的な発想が行われた。それに対して有名なベネディクトは人類学から『菊と刀』を著わし、日米開戦後のアメリカは、むしろ日本語教育を強化したこととくらべたとき、本当に日本の社会の考え方あるいは思想というものがこれでいいのかということを考えさせられる。そういう意味でこれまで申し上げた、社会の要請と国家の要請というものがバランスをとりながら社会発展の中で定着しなければならないのではないかと思う」と。

1994年度合同研究部会報告

中央大学広報部大学史編纂課 中川 壽之・松崎 彰

はじめに

1994年度の東日本大学史連絡協議会と西日本大学史担当者会の合同研究部会は、「大学史資料の収集と活用方法」を統一テーマに掲げ、西南学院大学および九州会館福岡ガーデンパレスをメイン会場として10月5日から7日の3日間にわたって開催された。第3回を迎えた合同研究部会の参加大学および参加者は、東日本26校・42名、西日本18校・32名、東西両会を合せて44校・74名を数え、遠隔地での開催にもかかわらず多数の出席を得ることができた。

基調講演Ⅰ・福岡市博物館の見学

研究部会初日の10月5日は、両会のメンバーが会場校の西南学院大学に集合し、はじめに両会を代表して同志社大学史資料室河野仁昭氏が開会の辞を述べた。次に西南学院大学田中輝雄学長の挨拶があった後、基調講演Ⅰとして同大学高倉洋彰文学部教授が、「考古学資料から歴史を復原する」という演題で講演をおこなった。司会は、西南学院大学広報・調査課長芳永弘氏であった。高倉先生の講演は、考古学の復原の分析方法や資料の整理方法などが、大学史資料の保存にも適応できる点を大宰府史跡の実例を紹介しつつ論じた内容であり、興味深い指摘が数多くあった。その後、会場を福岡市博物館に移し、同館学芸課野口文氏を講師として、展示や教育普及活動など諸事業の概要をうかがった後、施設紹介のビデオを鑑賞した。次いで、同氏の案内により1階の荷受荷解場・燻蒸室・撮影室・資料整理室・収蔵庫などを中心に見学し、所蔵資料の説明をうけた。収蔵部門の見学終了後、参加者は2階の常設展示・特別展示をそれぞれ見学した。近年、県および市町村立の資料館や博物館の新設が相次いでいるが、新設館になればなるほど設備が充実してきている。同館もまた、充実した設備をもつ新設館であった。

博物館見学後、会場を福岡ガーデンパレスに移し、研修懇親会が開かれた。はじめに西

南学院大学の芳永氏と明治大学歴史編纂事務室長内河久平氏から挨拶があった。続いて梅花学園資料室遠藤トモ氏の乾杯の音頭で幕が開くと、3回目の研究部会のことでもあり、会場では東西顔見知りの会員同志で早速歓談に花が咲き、そろそろ東西の枠を越えて両会合同を目指すべきとの提案も飛び出して満場の賛同を得るなど、和やかな中にも全国的規模への飛躍と活動の充実を求める意気込みで、会場内は大いに盛り上がった。司会進行役は、神奈川大学大学資料編纂室の澤木武美氏にお願いし、中央大学広報部大学史編纂課長村松良人氏と西南学院大学の芳永氏の挨拶で閉会した。

基調講演Ⅱ・パネルディスカッション

翌6日は、会場を福岡ガーデンパレスの会議室に移して、基調講演Ⅱとパネルディスカッションを開催した。午前中は、福岡大学の藤本隆士商学部教授が、「日本の近代化と高等教育—大学史を見つめて—」という演題で講



講演する藤本先生

演をおこなった。藤本先生の講演は、戦前期における高等教育行政の展開を概観し、特に私立大学の発生と発展を展望しようとした内容であった。なお、講演の詳細については、本号掲載の福岡大学大学史資料室藤本俊史氏の報告を参照していただきたい。

次いで、午後からはパネルディスカッションが開かれた。統一テーマ「大学史資料の収集と活用方法」にもとづいて、2本の報告と1本のサブ報告があった。最初の報告は、福岡大学大学史資料室後藤正明氏「福岡大学の大学史」であった。後藤氏は、詳細なレジュ

メをもとにまず福岡大学の沿革を紹介し、続いて同大学の既刊の年史（25年史・35年史・50年史・写真集など）についてそれぞれ刊行経緯を説明された。このなかで特に『福岡大学五十年史』（上下巻・別巻・年表資料集、昭和62～63年発行）をとりあげ、その特徴として人物史に重点をおいて編纂をすすめた点や、九州の小・中・高をあらかじめ念頭において年表づくりをおこなったことなどを強調された。次に、年史編纂室の沿革・人的構成・予算について、現在、50年史編纂後の組織として福岡大学総合研究所内に広報課「大学史資料室」が設けられ、資料の収集整理・保存が継続的におこなわれていることを述べられた。さらに、学内外からの資料収集状況について説明があり、また資料分類の事例として新聞切り抜きと写真の各整理ファイルが回覧され、具体的な方法が示された。なお、整理された資料の活用方法については、学内外からの依頼に応じて資料室で検討の上、適宜資料提供をおこなっているとの説明があった。

第2報告は、日本女子大学成瀬記念館秋山俱子氏「展示で知らせる学園史」で、はじめに成瀬記念館の概要がビデオ（約17分）で紹介された。その後、1984年10月の開館時から1994年9月までの「展示一覧」（レジュメ）にもとづいて、展示による大学史資料の具体的な活用の実態とその有効性について言及された。特に、資料展示を前提として借用したものがそのまま寄贈されるといったケースが紹介され、展示を通じて資料収集の範囲や可能性が広がった点を強調された。また、同記念館が1989年に博物館相当施設の認定を受け、学芸員養成のための博物館実習をおこなっていることや、同大学の2・3年生を対象にした教養特別講義を実施するといった教育課程と密接に結びついた活動を展開している点を指摘された。さらに、この秋山報告に対応する形で、梅花学園資料室遠藤トモ氏が「梅花学園資料室の資料活用の事例」（レジュメ）にもとづいてサブ報告をおこない、研究・展示等々の資料館活動の有効性を強調された。

3報告の終了後、中央大学広報部大学史編纂課松崎彰・中川壽之を司会・書記として討議に移った。まず、大学史資料の収集から保存にいたる間の諸問題をあつかった後藤報告



報告者の秋山氏（左）、後藤氏

をめぐって質疑応答があり、資料の収集については各大学ごとに様々な経緯を持つとはいえる、資料保存の重要性についてほぼ共通の認識が形成されつつある実態が確認された。つづいて、討議の中心は、資料の保存から活用にいたる間の諸問題をとりあげた秋山・遠藤両報告に移り、活用の一形態としての展示をめぐって展開した。特に、展示という活動が大学と卒業生・社会との掛け橋として効果的に重要な意味を持つばかりでなく、たとえば学芸員の博物館実習として教育課程と結びついているという成瀬記念館の実態は、各大学から高い評価と支持をうけていた。単に年史編纂だけのために大学史資料を収集・保存してゆく体制ではなく、学内外の接点として資料が幅広く有効活用される組織づくりが重要であることを改めて認識し、東海大学資料室竹市知弘氏の挨拶でパネルディスカッションを終了した。

観世音寺・九州歴史資料館・太宰府天満宮の見学

最終日の10月7日は、施設見学であった。福岡ガーデンパレス前に参加者が集合し、2台の貸切バスに分乗して観世音寺を訪れた。同所で、九州歴史資料館副館長石松良雄氏を講師として、同寺および国府の発掘・復元事業の概要をうかがい、隣接の展示館で国宝・重要文化財に指定されている仏像などを見学した。続いて、九州歴史資料館を訪れ、石松氏から同館設置の趣旨・沿革および施設の概要をうかがった。また、写真資料部門担当の石丸洋氏からは、大宰府史跡関係発掘調査・美術工芸・県内発掘調査による最新資料展示という3つの特色をもつ同館における写真資料の整理について、①フィルムの分類、②フィルム番号の記入、③基本台帳の記入、④基

本アルバムの整理、⑤索引カードの作成、⑥写真貸出し、など具体的な業務について整理されたアルバムなどを実際に見ながら、詳細な説明を受けた。次いで、考古学資料の発掘・整理・保管・展示にいたる一連の作業と同館の展示を見学し、太宰府天満宮を訪ね第3回合同研究部会の全日程を終了し、現地解散した。むすび

大学史資料について、収集から保存にいたる間、さらに保存から活用にいたる間の諸問題をめぐって討議された今回の合同研究部会も、全体として充実した内容であったといえる。これまでの2回の合同研究部会と比較して特に画期的な点は、議論が「大学史資料の活用」問題に踏み込んだ点であろう。大学の資料を何のために保存するのかという問題を考える際、歴史や教育史の資料としての価値は從来から指摘されているが、それはあくまでも活用の一形態である。実際には、大学史資料は大学と社会とを結びつける接点であり、学的には組織と教育課程の有機的連関を保障する手段となりうるのである。ともあれ、研究部会に出席した各大学もまた、共通の認識を持つつある点だけは事実である。

最後に、今回の研究部会を福岡で開催するにあたって、会場・見学場所の設定からホテル・バスの手配まで、いろいろと煩わしい準備作業を快くお引き受けくださった西南学院大学の芳永氏、井上憲治氏、吉田直史氏はじめ、ご尽力くださった各位に御礼申し上げてむすびとしたい。

<参加者一覧>

* <東日本大学史連絡協議会>

愛知大学 50年史編纂委員会	田崎 哲郎
学習院大学 学習院大学史料館	桑尾 光太郎
神奈川大学 大学資料編纂室	澤木 武美
慶應義塾 福澤研究センター	入谷 秀夫
國學院大學 校史資料室	中森 東洋
國立館大学 国立館資料室	益井 邦夫
成蹊大学 総務部学園史料館事務室	佐藤 芳郎
拓殖大学 創立百周年記念事業事務室	原田 清美
玉川学園 教育博物館学園史料室	安部 順也

大乗淑徳学園 総務部広報担当	三好 一成
中央大学 広報部大学史編纂課	村松 良人

津田塾大学 学長事務室	中川 寿之
-------------	-------

松崎 彰
丸山 昌子

'東海大学 資料室

東京基督教大学 歴史資料保存委員会	朝丘 满喜子
東京経済大学 学長室	手島 修藏
東京農業大学 図書館	杉本 秀健

東洋大学 井上円了記念学術センター	久保田 文恵
-------------------	--------

日本女子大学 成瀬記念館	三浦 節夫
日本大学 大学史編纂室	澤村 治

法政大学 多摩図書館資料課	鬼柳 正信
宮城学院女子大学 宮城学院資料室	伊勢 文夫

武蔵学園 企画室	鈴木 勝司
----------	-------

武蔵野美術大学 大学史史料室	渡辺 博志
----------------	-------

明治大学 総務部歴史編纂事務室	内河 久平
-----------------	-------

立教大学 図書館大学史資料室	最上 登
----------------	------

早稲田大学 大学史編集所	関田 かおる
--------------	--------

<個人会員>

北村 和夫 (聖心女子大学文学部教育学科)

小林 愛子 (上智大学聖三木文庫)

高木 雅史 (名古屋大学史編集室)

寺崎 弘康 (神奈川県立博物館)

中野 実 (東京大学大学史史料室)

中村 治人 (名古屋大学史編集室)

広沢 伸彦 (聖心女子大学大学史編集室)

細井 守 (藤沢市文書館)

* <西日本大学史担当者会>

大阪経済大学 総務部

大阪国際学園 広報室

大谷大学 真宗総合研究所

追手門学院大学 記念資料室

関西学院大学 学院史資料室

関西大学 出版部出版課

九州大学 大学史料室

久留米大学 企画部広報室

甲南大学 企画部広報課

神戸女学院 史料室

神戸山手学園 学園史編纂準備室

西南学院大学 広報・調査課

同志社大学 社史資料室

梅花女子大学 梅花学園総務部資料室

福岡大学 広報課大学史資料室

桃山学院 学院年史委員会

立命館大学 百年史編纂室

龍谷大学 大学史誌編纂室

竹市 知弘
日露野好章

朝丘 满喜子
手島 修藏

杉本 秀健
久保田 文恵

三浦 節夫
澤村 治

秋山 俱子
五谷 十三雄

柏村 哲博
鬼柳 正信

伊勢 文夫
鈴木 勝司

渡辺 博志
内河 久平

最上 登
関田 かおる

川村 孝則
藤江 宗一

藤田 昭彦
園山 和彦

宇田 正
川崎 啓一

園山 登
中井 熊

川崎 博毅
折田 悅郎

山本 華子
佐藤 敬輔

佐々木 泰彦
下村 妙子

上野 輝将
若山 晴子

寺西 加恵
松井 文雄

野中 俊男
芳永 弘

井上 憲治
吉田 直史

河野 仁昭
中西 清和

遠藤 卜モ
後藤 正明

藤本 俊史
西口 忠

原 登久雄
西川 賢

向山 晃祥
花月 大誠

吉岡 義信
(五十音順・敬称略)

1995年1月26日（木）研究部会・講演会

企業における史料の保存管理

企業史料協議会監事 中村 賴道

はじめに

安田生命の百年史編纂を担当した経験と、刊行後に資料調査室長として史料室を充実させてきた経過並びに企業史料協議会の設立と運営に参画してきたなかで得られた情報と知識を基に、以下レジュメの項目に従って説明する。

1. 企業史料保存管理上の諸問題

(1)企業経営と史料保存

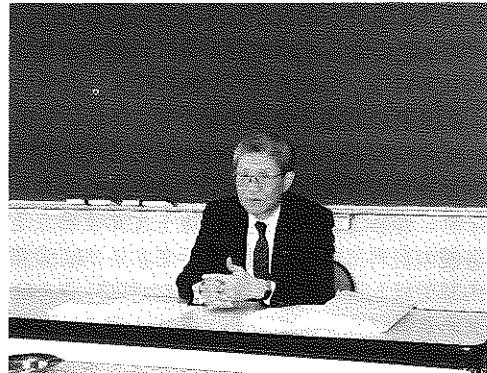
①フローの「資料」とストックの「史料」
企業経営の記録は一般に現用文書、半現用文書、非現用文書を経て保存または廃棄処分される。現用文書は特定の業務活動を行うため必要なものとして発生し利用されるもので、フローの「資料」として位置づけられる。そして当該業務活動の終息とともにその資料は不要となり非現用文書となるが、意識的か無意識かは別として、結果的には残され、ストック「資料」となり、この中から史料的価値のあるものとして保存されるのが本来のストック「史料」である。従来は発生した記録文書が結果として蓄積されることはあるが、「史料」の形成自体を意識して企業が対策を講じてきたとは必ずしも言えない状態であった。

②企業の社会的責任

しかし、最近では経営活動の記録を後世に伝えることも企業の責務の一つであるとの認識が徐々に高まり、そのために資料の収集を適切に行い、それを「史料」として蓄積していくことの姿勢が次第に現われてきていることも事実である。

③収集保存の目的

企業が資料を収集し保存管理しようとする目的は、凡そ次の4点があげられる。①将来の社史編纂に備えて必要な資料を保存してお



講師・中村賴道氏

くこと、②企業内部で“明日の経営”的めに参考となるデータを過去の記録の中から求めるニーズに応えレファレンス・サービスを行うこと、③企業博物館・史料館の開設運営のため史料を収集管理しておくこと、④学術研究用に資するため史料を蓄積しておくこと、である。

(2)史料保存のための障害

①限られた経営資源

企業が現実の経営活動の中に、史料保存という機能をどう位置づけるかという大きな課題がある。企業は種々の経営課題を抱えており日々多くの案件処理に忙殺されている。従つて史料保存にまで意識が回らない、または史料保存の意義を理解したとしても、経営資源は有限であり配分すべき多くの分野の中で史料保存という分野は優先順位が低い。つまりヒト・モノ・カネを十分分配してくれない、これが障害の一要因である。

②分散管理と集中管理

企業が資料を管理する場合、一般的に言って発生する場所つまり作成する部門単位で行う分散管理と、専門の部署を設け作成部門から移管を受けて行う集中管理とがあり、概して両者を併用しているところが多い。いずれ

の方法にも一長一短、メリット・デメリットがあるが、これらのバラバラに管理された膨大な資料の中から選別し史料を蓄積するには、相当のエネルギーが必要である。

③煩雑な日常業務

史料を保存管理する目的を定めても、実行に当たっては種々の煩しい問題が発生する。それを少しでも除去するためには収集、整理、保存、利用といったあらゆる面で、5W1Hを念頭に置いた制度やシステムの構築が必要である。しかも実際の運用面では理想と現実の乖離に悩まされる。

④史料の著増と廃棄運動

近年は社会・経済の変化が激しく、企業の経営施策も日進月歩の勢いで革新が行われ、それに伴って情報伝達手段としての文書など各種の資料は膨張し続けている。一方、企業内部ではムダの排除、執務環境の整備、スペースの有効活用を図るために、その一環として資料の廃棄運動が恒常的に行われている。廃棄運動そのものには意義を認めるが、たとえ一部でも貴重な資料が散逸する恐れがあり、史料保存の立場から注視する必要がある。

⑤OA化の進展とペーパーレス時代

これには二つの側面がある。一つは企業内のOA化の進展に伴って情報の記録形態が変化してきていること、もう一つは資料の管理業務をどのようにOA化していくかである。いずれの面もいかに効率よく合理的に行っていくか、各企業とも頭を悩ませているのが実状である。

(3)企業間の跛行性

①経営方針・制度

以上のように企業史料保存管理上の問題点なり障害についてポイントを説明したが、もう一つ述べておきたいことは企業間の跛行性についてである。結論的に言えば、経営層の方針や価値観によって左右され、その結果、企業間に相当のバラツキがあるのはやむをえない。企業史料協議会が行ったアンケート調査からその一例を示すと、規程などで保存・廃棄について制度化しているかという質問に対して、YESが5割、NOが4割もあった。

②経営資源の配分

さらに、前記のアンケート調査からいくつか具体例をあげると、史料管理担当者数は男

性で最少1名から最多は10名、史料室のスペースは最低10m²、最高2400m²、ファイル数最低2冊から最高5000冊、ロッカー・キャビネット1本～100本といった具合に、ヒト・モノ・カネの手当が区々である。

2. 収集・保存・管理の基本的対応策

この項目は、主として安田生命百年史編纂後に資料調査室の長期計画を立て、段階的に実行し10年余を経て今日に至った内容についての説明である。

(1)迅速・確実な収集

①収集資料の体系化

まず大切なことは現用資料をとにかく早く確実に収集することである。収集する目的は先述した将来の社史編纂用とレファレンス・サービス対応用の2点にしぼり、そのために必要とする記録資料は何か、どの部門にどのような資料が存在するかを調査し、業務分野別に収集資料を体系化した。

②チェックリストの整備

次に具体的な資料名を部門別に列記し、確実に収集したかどうかを記録しておくためにチェックリスト化（見本を回覧）し、収集作業を行っている。

③記録保管保存規程

上記②は資料調査室員の実働作業によって行うことであるが、さらに制度面で資料が集まりやすくする方法を講ずべきであると考え、規程（当初は文書保管保存規程、現在は記録保管保存規程）の改正を働きかけた。その結果、第18条で作成部門に社史資料として資料調査室への提供を義務づけ、第21条では資料調査室長が各部の保管状況を年1回以上視察できることとして、重要資料の発掘を可能にした。

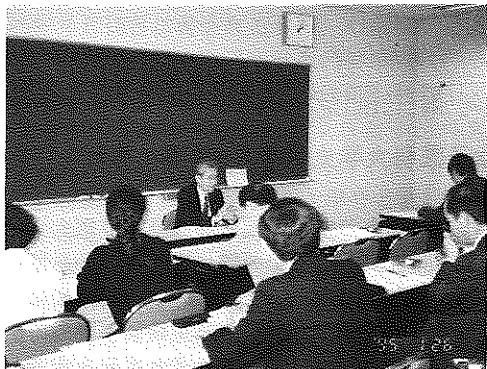
④各部門担当者との連携

制度ができて収集率が向上したとはいえる、理想と現実の乖離は依然としてあり、完璧を期することは難しい。そのためにはアンテナを高くし情報の入手に務めなければならない。従って諸会議の事務局や各部門の記録保全担当者とのコミュニケーションを図っている。

(2)保存管理体制の整備

①検索・利用の便を図る

折角収集した資料も、段ボール箱に詰め込



第33回研究部会（1月26日）

んだり無差別にキャビネットへ格納してしまっては意味がない。特にレファレンス・サービスを目的の一つに掲げた以上、検索・利用に便利なように保存管理体制を整備する必要がある。

②場所・物・人の手当

そのためにはキャビネット・ロッカー、書架その他諸々の整理保管用ツールが必要であり、それらを設置する余裕をもったスペースを確保しなければならない。さらに整理作業を行う人材も手当すべきで、いわゆる経営資源の配分を段階的に要請し、実現してきた。

③整理手順と方法

ファイリングシステムなど各社がそれぞれの方法を講じているので詳述は避けるが、一点だけ説明しておきたいことは整理手順に仮整理と本整理の2本立を探っていることである。欠落の補填その他の理由で、基本的には当年度内は仮整理と翌年度に整本など本整理を行うものである。

(3)主要経営活動の記録

①将来のための記録の蓄積

収集・整理・保存という一連の業務からさらに一歩進めて、将来の社史編纂者のために、主要な経営活動について記録し蓄積しておこうという考え方で、百年史で記述した次の年度分から実行に移した。

②ホットな段階での記録

上記のこととは、3年程度或いは数年度分をまとめて記録するという考え方もあるが、近年のように変化が激しく経営施策も多様化しているだけに、時機を逸せずホットな段階で記録しておいた方がベターと考えたので、毎月実行してきた。

③記録方法

記録する方法は、まず収集した資料の中から主要なものを史料カード（見本を回覧）に記入し、1カ月間のカードをまとめた段階で主要事項を月報化して上司に報告、さらに1年経過後に年間の主要事項を「毎年史」として記述しておくという3段階方式を採用した。

④記録管理のOA化

上記の方法は当初手作業で行っていたが、資料の蓄積も次第に膨大となり作業量は増加の一途を辿ることが自明の理となって、すべての作業をOA化すべきと判断し、ソフトの開発と合せて事務手順書を作成した（見本を回覧）。OA化が一応完成した段階では、すべての事項が入力され（カードは廃止）、月報と毎年史もそれぞれ〇月度・〇年度主要経営記録（見本を回覧）として出力している。OA化によって検索が飛躍的に向上するとともに、省力化効果が出ていることは言うまでもない。

3. 企業史料協議会の概要

以上でメインのテーマについての説明は終わるが、一言企業史料協議会についてPRさせて頂く。詳細は席上配布した『地方史研究』246号のコピーを閲覧願いたいが、主要な活動としては、①企業内資料の収集保存管理に関する研究会、②博物館・史料館の設立運営に関する研究会と見学、③友好諸団体との交流並びに海外との交流、④ビジネスアーキビスト養成講座の開設、などである。

おわりに

史料の保存管理という職務は苦労が多く、地味で息の長い持続性が要求される。また、営業部門や財務部門などのように達成感や満足感が得られにくい仕事でもある。言い換えると、担当者は駅伝の一区間を受け持つランナーのようである。自己の担当する区間を道を間違えずに全力を尽くし、次のランナーにたすきを渡さなければならない。史料管理という職務に対し意義を認識して興味深く仕事をこなし、その結果としてそれなりに達成感が得られるかどうかは、担当者の心がけ次第で決まるといつても過言ではない。

（東亜電波工業株式会社常勤監査役）

1994年11月29日(火) 研究部会報告

東京女子医科大学史料室・吉岡彌生記念室について

東京女子医科大学史料室 亀高 雅代

第32回研究部会において東京女子医科大学史料室・吉岡彌生記念室に関する報告を行なった。当日の流れは、本学の歩み、史料室および記念室の業務説明、そして質疑応答終了後、記念室の見学となった。

<東京女子医科大学の歩み>

東京女子医科大学は1900年12月5日東京女医学校として吉岡彌生・荒太夫妻によって設立された。当時、医師を志す女性の唯一の学校であった済生学舎が女子を受け入れなくなつたことが設立のきっかけである。

1912年には専門学校に昇格した。このことは本学にとって重要な意味を持つ。なぜなら、それまで医師になるには受験資格を問わない医術開業試験に合格することが必要であったが、1906年の医師法改正によって1914年以降は、専門学校以上の卒業者でなければ医師試験を受験できなくなったためである。この専門学校昇格は、後に吉岡彌生が最も嬉しかったことの一つとして上げている。

その後は、文部大臣指定校として本校卒業生は無試験で医師の免許を得られるようになり、戦後には大学へと発展した。設立のきっかけが女子の医学教育にあるため、世界唯一の女子医科大学として現在に至っている。

<業務説明>

大学史料室は1966年11月、『東京女子医科大学小史』編纂のために収集された資料を基にして設立された。史料室の主な業務は、創設者とその関係者および本学教員、卒業生に関する資料の収集・整理・保存、また女医やその関連分野として女性史・学校史等の資料文献を収集して調査研究を進めることである。

所蔵資料は、創設者に関するものは親族、卒業生等からの寄託、寄贈によるものが多い。その数は創設者吉岡彌生・荒太関係が約550点、東京女子医科大学関係、病院関係等の資料が約650点、写真が約1万1000点となっている。

資料室の収集活動としては、創設者の出身地を訪問し調査を行なった。1993年の9月に

は吉岡彌生の生家が残る静岡県小笠郡大東町を訪問し、吉岡彌生の甥に当たる方から話を伺うことができた。また、昨年の11月には吉岡荒太の故郷である佐賀県東松浦郡肥前町高串で調査を行なった。それぞれ家屋を実測して図面を作成し、写真・ビデオ等に収め、親族の方の貴重な話を記録にとった。そのため、所蔵資料は以前の集計より著しく増加したと思われる。

保存・管理に関しては、資料保存用封筒を作成した。作成に当たっては東日本大学史連絡協議会会員校への電話による調査、文献として「史料館における史料保存活動」(山田哲好 廣瀬陸『史料館研究紀要』22号 国文学研究資料館史料館 1991)を参考にした。保存用封筒に入れ校舎三階の一部にある倉庫で管理している。この倉庫は室温設定が出来るようになっている。写真類はプリントしたものとネガとを分けて管理している。内容ごとに分類カードを作成しているが、枚数の増加が著しいため新たな分類法を検討中である。

次に、吉岡彌生記念室の展示活動についてだが、この記念室は1970年に創設者吉岡彌生の業績を広く伝えるために開設されたものである。常設展に加え年2回の企画特別展を実施している。常設展では、吉岡彌生関係の資料と共に、東京女子医科大学の前身である東京女医学校・東京女子医学専門学校時代の資料を展示している。

特別展は5月と12月に一ヵ月ほど行なう。5月の特別展は22日の吉岡彌生の命日に合わせて企画を立てる。昨年は「彌生の足跡」と題して彌生の一生をパネル写真で振り返った。12月の特別展は5日の創立記念日に合わせて行なう。昨年は東京女子医科大学の学会が開催されて60周年を迎えたため「東京女子医科大学学会60年の歩み」展を行なった。

記念室に史料を展示するにあたっては、劣化が激しいものに関してはレプリカを作成することにした。発注していた吉岡彌生書簡(19

45年8月15日に書かれたもの）の複製が完成し、引き続き東京女子医学専門学校時代の卒業証書（1916年）等の作成を計画している。

大学史関連の出版物は、『東京女子医科大学小史』1966年、『東京女子医科大学八十年史』1980年、『東京女子医科大学今と昔』1990年がある。

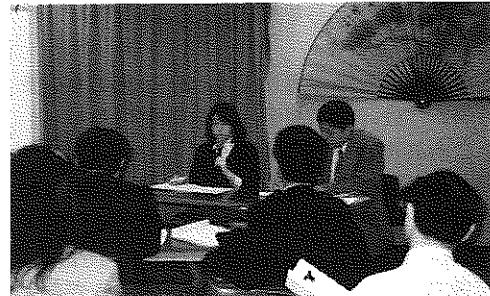
＜吉岡彌生記念室・旧臨床講堂見学＞

報告終了後は、臨床講堂と吉岡彌生記念室の見学を行なった。1930年に建設された現1号館である東京女子医科大学病院を通り、1934年に竣工された旧臨床講堂へと向かった。

1号館は、1930年当時大学昇格を目指すため、明治末以来増築と改築を重ねてしのいできた附属病院を近代的な設備の整った病院に改築しようと建てられたものである。そして、旧臨床講堂は12月の特別展のテーマである東京女子医科大学学会（当時は東京女医学会）の第一回総会が開催された場所であり、現在でも短大の授業に使用されている。この二つは本学に残る戦災を免れた貴重な建物である。

吉岡彌生記念室は常設展の見学を行なった。日頃来室される方は、卒業生や戦前の女子医学教育に関心のある方等が多い。小規模な展示室ではあるが、一般の方が来室されても関心を示していただけるような展示を心掛けている。

1993年の2月に記念室を改装し展示形態も変わったため、今後一層展示と資料保存の両



報告する亀高氏

面に関して学んでいかなければならない。

＜今後の課題＞

今後の課題を挙げると、第一に2000年に創立百周年を迎えるため、百年史編纂の準備を進めること、第二に昨年調査した吉岡彌生の生家を移築して資料館を設立しようという動きがあるため移築・建設に関する準備が必要になること、第三に資料収集では、卒業生や本学関係者の協力を得るために会報などで呼びかけて資料増加に努めていくこと。以上の三点が今後の史料室運営における主要な課題として挙げられる。

今回の研究部会では、見学している際に展示方法についての助言を頂くなど今後の運営方法を考える上で大いに参考になった。創立100周年に向けてやるべきことは多数あるが課題を少しでも克服しながら活動していくたいと思っている。

早稲田大学文書の目録化と マイクロ化について

早稲田大学大学史編集所

【経緯】

大学史編集所は、『早稲田大学百年史』を編集する過程で、東京都公文書館所蔵の本学関係資料を複写するとともに、大学内外に所蔵されている関係資料を収集してきた。それらの資料のひとつが「早稲田大学文書」である。これは、文部省との往復書類をはじめ、大学の規約、教務、人事、給与、施設などの、学事および経営に関する書類で、いわゆる本部書類として大学本部各課（当時の教務課、人事課、経理課等）に保管されていた資料群である。本部書類は、個々の文書を作成し

た各箇所に保存責任があり、また文書の性格上、当該箇所で使用しているため、一ヵ所に集中管理して保存することは難しいという事情があった。その後、明治・大正期、昭和期も戦前までの古い文書類はまとめて保存されることが望ましいということになり、1973年（昭和48）頃から大学史編集所に順次移管されるようになった。さらに、1994年4月、大隈庭園に面して大隈会館（20号館）が開館し、その南側のS棟に本部関係事務所が集中して移転したのにともなって、旧本部内の倉庫等に保管されていた資料群が、いっきょに大学史編集所へ移管された。

移管資料の状況は下記のとおりである。

- (1)教務部移管文書① ファイル数 約120点
- (2)教務部移管文書② ファイル数 約137点

- (3)総務部法人担当移管文書 ファイル数 約30点
- (4)財務部移管資料
- (5)本部移転にともなう } ダンボール数100箱以上
移管資料

これらのうち、現在のところ一応の整理が済んだ(1)と(2)の移管文書については、すでに目録を作成して、『早稲田大学史記要』第7巻 (pp.119-126) と第9巻 (pp.145-151) に掲載した。しかし、この目録は、移管資料を時代別にわけた上で、大まかな内容別の数種に分類し、資料の各ファイルに記載されている表題をそのまま記載したものである。

ところで、集中管理の対象となって大学史編集所に移管された資料群は、書庫不足のために、その保管場所はロッカーなどに分散される状態が10年ばかり続いた。この間、これらの資料群は『早稲田大学百年史』の編纂のための基礎資料として活用され、その刊行にともない、古い記録にもとづく調査を依頼されるケースが増加してきた。したがって、資料の管理・保存ばかりでなく、閲覧の利用に供するためには、資料の各ファイルごとに内容細目がわかるリストの公開が痛感された。

さらに、時間的経過によって破損した文書や酸性紙のために紙質が劣化した文書の保存については、早急に手を打たねばならなくなつた。まず、傷みのはげしい文書の補修である。それは、文書の1枚ごとに裏へ補修の薄紙を貼る「裏打ち」という作業であるが、そのためには文書の枚数をも確認する必要があり、文書の1枚1枚に「丁打ち」(ページをつけること)をして、文書リストを作成しなければならない。「丁打ち」の作業をすることは文書の1枚1枚に目を通すことでもあり、しかも文書の内容をリストアップすることはおのずから内容細目の作成作業となる。

そこで、こうした作業をより有効的におこなうための方法が検討された。まず第1は、文書の細目をコンピュータで検索できるようにデータベース化することである。第2には、裏打ちの済んだ文書を写真に撮影して、閲覧の便に供するためのマイクロフィルム版を作成することである。これらの作業は並行しておこなわれるほうが効率的であるので、同時に予算化することになった。

1985年秋の予算申請において、「早稲田大

学文書」の補修およびマイクロ化費用の特別申請を提出したが、この重要性を認めた予算が承認されたのは、ようやく1988年度の予算においてであった。これ以後、年度計画案にもとづき、一連の作業にかかる費用についての予算(年間約150万円)が割り当てられることになったのである。

さっそく1988年の夏休み前から下準備にとりかかり、「丁打ち」と文書細目のデータベース入力作業が同年11月からはじまった。この作業が済んだ資料から、順次「裏打ち」をして、それからマイクロフィルムにするための撮影を依頼するのであるが、これらの作業はつぎの人々によっておこなわれてきた。

(A)「丁打ち」とデータベース入力作業

1988年11月～1990年3月

堀 新(早稲田大学大学院文学研究科院生)

1990年4月～1995年1月現在

中川 和明(同 大学院文学研究科院生)

(B)「裏打ち」作業

1989年4月～1995年1月現在 渡邊政明

(C)マイクロ・フィルム撮影

1990年10月～1995年1月現在

日本マイクロ写真株式会社

こうして、さきに述べた移管資料のうち現在までにマイクロ化の過程まで済んでいるのは、前述の(1)教務部移管文書のうちの64点と(3)総務部移管文書の30点である。本格的な事業としては、まだ緒についたばかりといつてよい。だが、ともかくも移管文書の1点ごとの詳細な内容細目が整ったことでもあり、必要に応じて閲覧の便に供する準備はできた。とりあえず、第1回の試みとして、本稿では明治期と大正期のものを収録し、公表することとした。しかし、文書のなかにはプライバシーにかかる資料も含まれているので、当分の間、当該文書は学内関係者にたいしてのみ公開される予定である。なお、閲覧の要領に関しては、手続上のマニュアルを作成することになっている。

ともかくも、このたび作成したようなこの目録が、早稲田大学の歴史ばかりではなく、日本近現代史の研究の発展に資するならば幸いである。

〈早稲田大学教務部主幹(大学史編集所出向) 関田かおる〉

常任委員会議事録（抄）

- 第46回 1994年10月5日(木)12時～12時30分
 会 場 西南学院大学本館 会議室
 出席校 神奈川大学 成蹊学園 玉川大学
 中央大学 東海大学 明治大学
 (西日本大学史担当者会)
 同志社大学 梅花学園 関西大学
 関西大学学院 神戸女学院大学
 西南学院大学
- 議 事 (1)1994年度合同研究部会の運営について
 (2)その他
- 第47回 1994年11月29日(火)13時～14時
 会 場 東京女子医科大学 会議室
 出席校 神奈川大学 慶應義塾 國學院大学
 成蹊学園 玉川大学 中央大学
 東海大学 日本大学 明治大学
- 議 事 (1)1994年度研究部会の運営について
 (2)東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会統合の件について
 (3)1995年度合同研究部会について
 (4)会報『大学アーカイブス』第12号の編集について
 (5)その他
- 第48回 1995年1月26日(木)13時～14時
 会 場 中央大学駿河台記念館310号室
 出席校 神奈川大学 成蹊学園 玉川大学
 中央大学 東海大学 日本大学
 明治大学
- 議 事 (1)東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会統合の件について
 (本年1月20日に西日本大学史担当者幹事会が開催される予定であったが、阪神大震災のため中止されたとの報告があった。西日本担当者会会員校の被害状況については、梅花学園の遠藤氏に事態が判明次第連絡をお願いしているが、本会としてもできるかぎりの援助をしたいとの提案があり、承認された。)
 (2)1995年度合同研究部会について
 (3)1994年度研究部会について
 (4)会報『大学アーカイブス』第12号の編集について
 (5)その他

研究部会記録（抄）

- 第31回 東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会
 1994年10月5日(木)～10月7日(金)
 会 場 10月5日 西南学院大学・福岡市博物館
 九州会館福岡ガーデンパレス
 10月6日 九州会館福岡ガーデンパレス
 10月7日 観世音寺・九州歴史資料館・太宰府天満宮
- 参加校 東日本 26大学、8個人会員
 西日本 18大学
 計44大学、8個人会員 74名
- 見 学 10月5日 福岡市博物館
 (荷受荷解場・薰蒸室・撮影室・資料整理室・収蔵庫などの施設を見学後、常設展示・特別展示見学)
 10月7日 観世音寺・九州歴史資料館・太宰府天満宮
 (最初に観世音寺を訪れ同寺本堂・鐘楼と隣接展示館内の国宝・重要文化財指定の仏像などを見学、つづいて九州歴史資料館を訪れ、考古学資料の発掘・整理保管・展示にいたる一連の作業を見学、最後に太宰府天満宮を見学)
- 講演会 10月5日 高倉洋彰氏(西南学院大学文学部教授)
 (演題)「考古学資料と整理について」
 (西南学院大学本館4階大会議室)
 10月6日 藤本隆士氏(福岡大学商学部教授)
 (演題)「日本の近代化と高等教育－大学史を見つめて－」
 (九州会館福岡ガーデンパレス)
 パネルディスカッション 10月6日
 報告1 「福岡大学の大学史」
 後藤正明氏(福岡大学総合研究所員)
 報告2 「展示で知らせる学園史」
 秋山俱子氏
 (日本女子大学成瀬記念館)
 報告3 「梅花学園資料室の
 資料活用の事例」
 遠藤トモ氏(梅花学園資料室)
 司会 松崎 彰氏
 (中央大学大学史編纂課)

書記 中川壽之氏

(中央大学大学史編纂課)

※講演会・パネルディスカッションの内容につきましては、本号に掲載した諸報告をご参照ください。

第32回 1994年11月29日(火) 14時~16時

会場 東京女子医科大学中央校舎1階会議室

参加校 24大学・37名

報告 亀高雅代氏(東京女子医科大学史料室)

「東京女子医科大学史料室・吉岡彌生記念室について」

※2月14日付で、西日本大学史担当者会から阪神大震災後の状況について次の連絡をいただきましたので、ここに紹介いたします。

東日本大学史連絡協議会の皆様には、益々ご清祥のことと存じ上げます。日ごろは何かとご高配にあずかり厚く御礼申し上げます。

さて、1月17日の阪神大震災に対しましては、貴会加盟校の皆様から公私にわたり、暖かいお見舞いやお励ましのお言葉を頂戴いたしまして、まことにありがとうございました。

あの日から、日を追って復興へと頑張っておられる神戸の大学の皆様には、一時はガス・水道・電気のライフラインも閉ざされ、少しは好転していますものの、未だにガスがでない地域もあり、暖房も危険なためにつけられず、寒い部屋での勤務もあると伺っております。

大阪の大学は殆どがガラスの損傷と校舎の壁の表面的な亀裂位で済んだようです。しかし、神戸方面にご自宅のある方の中には、住めない状態になり、ご実家や親戚に避難され、そこから通勤しておられる方もあります。

正確な記録は西日本の方で取りまとめる所存でございますので、とりあえず現時点では一歩一步坂道を登っている心境でありますので、その点おくみ取り頂きまして東日本大学史連絡協議会の皆様のご声援に応えられますよう、阪神の大学も頑張って参りたいと思います。

末筆ながら、お見舞いに対し、深く感謝申し上げます。

1995年2月14日 西日本大学史担当者会

※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した亀高氏の報告をご参照ください。

第33回 1995年1月26日(木) 14時~16時

会場 中央大学駿河台記念館310号室

参加校 16大学 2個人会員 28名

講演 中村頼道氏

(東亜電波工業株式会社常勤監査役)

「企業における史料の保存管理」

※講演の内容につきましては、本号に掲載した中村氏の「企業における史料の保存管理」をご参照ください。

阪神大震災で被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

東日本大学史連絡協議会

ご案内

※次回(第34回)研究部会は、3月22日(木)午後2時から駿河台大学(飯能市阿須698)で開催いたします。講師は駿河台大学教授廣瀬順皓氏、演題は「文化情報学部における歴史的情報の処理・保存」(仮題)です。

※本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。

〈事務局〉

中央大学広報部大学史編纂課

〒192-03 東京都八王子市東中野742-1

☎ 0426-74-2132

〈会報編集担当〉

神奈川大学大学資料編纂室

〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

☎ 045-481-5661

東海大学資料室

〒151 渋谷区富ヶ谷2-28-4

☎ 03-3467-2211

中野 実(東京大学大学史史料室)

〒113 文京区本郷7-3-1

☎ 03-3812-2111